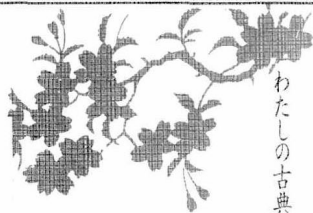


もろさあようこの
今昔物語集

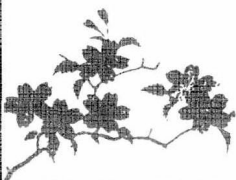




わたしの古典 11

もろさわようこの

今昔物語集



集英社

わたしの古典 こてん 11

もろさわようこの こんじゃくものがたりしゅう 今昔物語集

一九八六年八月二五日 第一刷発行

著者——もろさわようこ

編集——株式会社創美社

発行者——堀内末男

発行所——株式会社集英社

101 東京都千代田区一ツ橋二五—一〇

電話：出版部(〇三)二三八—二八三一

：販売部(〇三)二三〇—六一七一

：製作課(〇三)三三八—二九六四

印刷所——凸版印刷株式会社

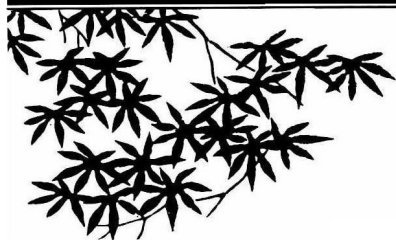
製本所——中央精版印刷株式会社

©1986 Yoko Morosawa. Printed in Japan ISBN4-08-163011-9 C1393

落丁・乱丁の本が万一ございましたら、小社製作課宛にお送りください。

送料小社負担でお取り替えいたします。

本書の無断複写・複製・転載を禁じます。



わたしと『今昔物語集』

『今昔物語集』の説話を素材とし、芥川龍之介^{あきたがわりのすけ}はじめ多くの作家が、かずかずの名作を書いている。

天竺^{てんじく}（インド）・震旦^{しんたん}（中国）・本朝（日本）三国の説話千数十編は、仏教説話と世俗説話に二大別されているが、近代文学の素材にされているのは世俗説話が多い。

私も先輩たちのひそみに倣い、世俗説話を主として素材にし、私なりの問題意識で、説話を再構成することにした。

そのため本書は、『今昔物語集』の直訳でも意識でもなく、説話を素材にした創作である。原書の説話のほとんどは、仏教・儒教思想が世俗化され、男女差別・人間差別を当然なものとして語られているが、私は、これらの説話を、「人間は自由なものとして生まれている」とする人権の思想で見なおすことにした。

また説話には、実在した人の名があげられているが、語られている内容と史実が異なっていることもすくなくない。そのため、当時の史実を参考にしながら説話を再構成したが、もちろんすべてフィクションである。

『今昔物語集』の特色の一つは、上は仏陀^{ぶつだ}はじめ国王から、下は盗人や下人といわれる人た

ちまで、あらゆる階層の人たちがとりあげられていることだが、本書においても、女の問題を中心に、それらにならって説話をえらぶことをした。

一般的に世に広まっているのは、『今昔物語集』の本朝編であるが、動物たちも登場する天竺編には、イソップの寓話ぐうわの流れものばれ、孝子・貞女・賢母などが語られている震旦編には戦前の女子教育の源流がみられるが、いずれも現代的な視点で焼き直してみた。

本朝編においては、すでに古典的名作とされている芥川龍之介の『芋粥』いもがゆや『藪の中』やぶなどに取り扱われた説話に、私なりにアプローチしたのは、芥川の世界とは異なった、生活者としてまことにしたたかな人間像をそこにみたからである。

「今は昔」と説話は語りだされているが、さまざまな欲につられてうごめく、愚かでこっけいな人びとの姿があまた見られる『今昔物語集』は、「昔は今」に重なり、世は移り、人は変わっても、人の生きる姿があまり大きく変わらないのはなぜなのかと、問いかけてもくる。

とり上げた作品の一つ一つにその問いをにじませたが、読者はどのように受けとめて下さるだろうか。

なお、参考には、「日本古典文学大系」(岩波書店)・「新潮日本古典集成」(新潮社)・「図説日本の古典」(集英社)・角川文庫などを用い、説話のタイトルは「日本古典文学大系」によった。

目次

わたしと『今昔物語集』	1
-------------	---

天竺の巻	9
------	---

雌獅子の子守歌	10
---------	----

獅子、猿の子を哀れび肉を割きて驚に与へたる語（巻五・第十四）

月の中の兎	19
-------	----

三獸菩薩の道を行じ、兎身を焼ける語（巻五・第十三）

人間だけが裏切る	27
----------	----

天竺の龜、人の恩を報せる語（巻五・第十九）

棄老国から養老国へ	38
-----------	----

七十に余る人を他国に流しやりし国の語（巻五・第三十二）

光を放つ女	44
-------	----

長者の家の屎尿を淨むる女、道を得たる語（巻三・第二十一）

震旦の巻	49
------	----

母と子	50
-----	----

震旦の韓の伯瑜、母の杖を負ひて泣き悲しめる語（巻九・第十一）

育兒と養老……………55

寒旦の郭巨老いたる母に孝りて黄金の釜を得たる語（卷九・第一）……………

生さぬ仲……………66

寒旦の周の代の臣伊尹が子、伯奇、死にて鳥となりて継母に怨を報せる語（卷九・第二十）……………

嫁と姑……………77

河南の人の婦、姑にみみずの糞をじさせしめたるによりて現報を得たる語（卷九・第四十二）……………

貞女……………84

長安の女、夫に代はりて枕をたがへて敵のために殺されたる語（卷十・第二十一）……………

妻と夫……………93

高鳳、算州の刺史に任じて旧き妻を迎へたる語（卷十・第二十五）……………

本朝の卷……………101

芋がゆ……………102

利仁の將軍若かりしとき京より敦賀に五位を將て行きたる語（卷二十六・第十七）……………

やぶの中……………128

妻を具して丹波国に行きし男、大江山にして縛られたる語（卷二十九・第二十三）……………

好色者 その一……………140

時平の大臣、国経の大納言の妻を取れる語（卷二十二・第八）……………

好色者 その二……………163
平定文に会ひし女、出家せる語（卷三十・第二）

重方の妻……………178

近衛の舎人とも稻荷に詣てしに、重方女にあへる語（卷二十八・第一）

染殿の妃……………189

染殿の後、天狗のために境乱せられたる語（卷二十・第七）

中務大輔の娘……………212

中務太輔の娘、近江の郡司の婢と成れる語（卷三十・第四）

力持ちの女……………231

尾張国の女、美濃狐を伏したる語（卷二十三・第十七）

尾張国の女、細畳を取り返せる語（卷二十三・第十八）

販女……………247

大刀帯の陣に魚を売りし姫の語（卷三十一・第三十一）

人、酒に酔ひし販婦の所行を見たる語（卷三十一・第三十二）

解説……………山口仲美……………261

参考図……………穂積和夫……………269

装幀……………菊地信義……………

写真提供・協力……………巖島神社（株）紫紅社・出光美術館……………

もろさわようこの今昔物語集

天竺の巻

雌獅子の子守歌

獅子、猿の子を哀れび肉を割きて鷺に与へたる語（卷五・第十四）

今は昔。天竺の山深い洞に、一頭の雌獅子が住んでいた。

彼女は、（獅子は百獣のかしらといわれているが、かしらの位を与えられているからには、その位にふさわしい生き方をするべきだ）と、考えていた。

ところが、獅子の姿をしていても、かしらの位にふさわしい生き方をする獅子はまれだった。

かしらとしてのあるべき姿を、理路整然と説き、それにふさわしくない獅子たちばかりが多い現状を、憂え嘆く獅子もすくなくらずいるにはいた。だが、言うことと、それを生きることとは次元がちがうのだろう。ことばほどには、その生き方が立派でないのが、かしらであることを誇示する雄獅子たちに多かった。

雌獅子が仲間たちから離れ、餌を得るのに不便きわまりない山深い洞に、ひとり住まいをはじめたのは、弱い獣を餌食にしなければ生きられない、強い獣の原罪性を、いつまでたっ



てもあたりまえにうなずくことができなかつたからである。

雌獅子は、生命を保つにたりるだけの餌を得たなら、あとは、もろもろの獣たちの役に立ちたいと願ひ、山の獣たちの身の上相談などに気軽に応じていた。

この雌獅子の住む山に、双児を産んだ猿がいた。子猿がまだごく幼かつたときには、一匹を腹に抱き、一匹を背に負ひ、山野をたずねて餌をさがしていた。けれど、子猿が大きくなるにつれて重くなり、その子猿を抱き、負ひすると、樹々きぎの枝を自由に飛び伝わり、谷を越えなどすることがおもうにまかせず、餌をさがすことがしだいに困難になつてきた。

このままでいたならば、母子ともども飢え死にするほかないと、母猿は途方にくれた。子猿をすみかに残して餌をさがしに行けば、まだ身うごき不自由な子猿たちは、猛鳥や猛獣にたちまち襲われるであらうしと、あれこれおもひ迷つて日をすごすうち、わずかに蓄えておいた餌も底をついた。

母猿が闇やみをきり裂く稲妻さながらの光で、雌獅子のことをおもひ出したのは、その日の餌のあてがまつたくなつた日の朝だつた。

母猿は、子猿たちを時に歩かせ、時に抱き、負ひして、雌獅子の洞の前に辿たどりついた。

雌獅子はおりよく洞にいた。

「獣のかしらのあなたは、すべての獣を大切にいつくしんでくださるそうですが、私もその獣のはしくれです。相談にのつていただきたくて参りました」

子育てのやつれが、そげた頬、艶を失った毛なみにいたいたしくにじむ母猿を、雌獅子は、洞の前の年経たばだい樹の木陰にいぎない、話を聞いた。

子猿たちは、見慣れぬ獅子の姿に、はじめはおびえ、母の背にかくれていたが、やがてこわいもの見たさの好奇心から、ほおずき色の小さな顔だけをさしのぞかせた。そして、んちやきらめく視線で、まじまじと獅子の様子を眺めていたが、危険がないらしいと見きわめると、そろりそろりと母の脇腹のあたりに這い出てきた。

母猿は、餌をさがしに出られなくなっただけを、まず語った。

「子どもをすみかに残して出かけ、もし、その間に、子どもたちが強い鳥や獣の餌食にされてしまうならば、子どもの生命を養うための働きが、子どもの命を失う結果になり終わるおそれが大きいのです。それで、まことに身勝手な願いですが、餌をさがしに行っている間、子猿たちをあずかっていただけませんかでしょうか」

母猿は、おもいあぐねた視線で雌獅子を見上げた。

「そんなことで、お役に立つなら、うれしいことです」

雌獅子は、さっそくあずかりましょう、安心して餌をさがしに行っていってらっしゃいと、母猿をあたたかくはげました。

母猿の目尻に、うっすらうれし涙がにじんだ。だが、子猿たちは、母の脇腹にしっかりとしがみついたまま、たやすく離れようとしなかった。



母猿の当惑を見てとり、雌獅子は、ひとりうなずきながら、洞へ入ってゆき、白く濁った水が入っている椰子の実の器と、みじかい葦の茎を持ってきた。

雌獅子は、器の水に葦の茎をつけて軽く吸い、その茎を空に向け、おだやかに吹いた。

葦の茎の先にあらわれたのは、うすく透きとおった水の玉。

「あら、とちまんぼこ」

母猿がおもわず言うと、雌獅子がほほえんだ。

「ひとり居のつれづれに、ときどきこんな遊びをするんです」

栃の実をすりつぶして水に溶き、葦の茎に軽く吸いこみ、空に向かって吹くと、うすく透きとおった水玉が陽ざしにきらめきながら風に舞い、幻のように立ちのぼって消えてゆく。

雌獅子は、ふたたび三たび、とちまんぼこを空に飛ばした。

子猿たちは、宙に舞うとちまんぼこに心を吸いとられ、つかまえようとして、おのずと母猿から離れた。

雌獅子の目くばせで、それと気づいた母猿は、氣配を殺してあとずさり、たちまち樹林の中に身を没した。

つかまえたとたん、かげもかたちもなくなってしまうとちまんぼこに、子猿たちが小首をかしげ、ふと振りかえって気づいたとき、母の姿はどこにもなかった。

うろたえ、鼻を鳴らして泣きだした子猿を、雌獅子はやさしくわが背に乗せた。母の肌の

ぬくもりから離れた二匹の子猿は、いたしかたなく、雌獅子の肌のぬくもりにおそるおそるしがみつき、ますます心細く泣きたてた。

「よしよし」と背をゆすり、子猿をなだめながら、雌獅子はゆるやかに歩みだした。

〽母猿 母猿 どこへ行つた

子猿を残して どこへ行つた

あの山越えて 野を越えて

わが子の餌を とりに行つた

〽餌をとるのは 楽じゃない

餌を求めて 生きものたちが

命をかけて あいあらそう

ほんにこの世は 生きがたい

即興的におもい浮かんだことばを、子守歌がわりに口ずさみ、雌獅子は背中の子猿をゆすりゆすり、洞のまわりを行き来した。

たやすく泣きやまなかった子猿も、やがて泣き疲れ、雌獅子の背中で泣き寝入った。

慣れない子守に雌獅子も疲れた。子猿たちが目覚めないよう、雌獅子は子猿を背中に乗せたまま、ぼだい樹の木陰にゆるやかに腹這った。